

東南アジア 脱炭素へ、アンモニア発電加速

気候変動対策エネルギー源で注目

欧米や日本など先進国が脱炭素社会の実現に動くなか、東南アジアで脱炭素化に向けたアンモニア発電が注目され、実用化に向けて動きが加速している。アンモニアは燃焼しても二酸化炭素(CO₂)を排出しないため、気候変動対策でエネルギー源の1つとして最も注目されている。

温室効果ガス排出量を実質ゼロにするカーボンニュートラルの目標を打ち出している国は多いが、東南アジア

ではベトナム、マレーシア、シンガポール、ラオス、カンボジアが2050年、インドネシア60年、タイは65年に達成する目標を掲げている。しかし、経済成長と脱炭素化の両立が大きな課題となって、脱炭素化への進展を妨げている。

ミャンマーを除くASEAN9カ国は高い経済成長を遂げている一方で、エネルギー需要が急増し、「脱炭素」は一進一退を繰り返す情勢にある。ただ、

それに直面しながらも国際的な協力を通じて脱炭素化を推進させている。

インドネシアでは、脱炭素化に向けた取り組みの一環としてアンモニア発電の実用化に向けて動きが加速しており、2030年頃から国内の石炭火力発電所を順次廃炉にする計画もある。

日本も「アジア・ゼロエミッション共同体(AZEC)構想」を通じてASEAN諸国と協力し、脱炭素技術の普及を支持している。再エネの利用拡大や水素、アンモニアなどの新しいエネルギー源の活用が推し進められている。